

奥陽名数（「宮城県史」第32巻の内）

仙台（小倉 博）

昔から今にいたる宮城県に関する名数（矢島玄亮、鈴木嘉美）

宮城名数（矢島玄亮）

名数みやぎ郷土小事典（菊地勝之助）

古寺巡礼辞典（中尾 堯編）

観音信仰（速水 侑）

残月台本荒萩（「仙台叢書」第1巻の内）

竹駒詣（国分町裳華房伊勢半、文政5年刊）

仙台市史第7巻

101 「はで」とはどういうことか

問 桃生郡の前谷地に「白鳥が池」という泉があって、その由来について次のような伝説があると

「郷土の伝承」第2輯に記されています。『桃生郡前谷地村字小友に白鳥ヶ池といふ附近の人達に飲料水を給している泉がある。この池は昔、子もちの白鳥がはでになって苦しんでいるのを此処の人が親切に介抱して飼っておいたので、その白鳥が此処の人々が飲料水に不自由で困っているのを見て自分の口はしで掘った池だといっている。』この文中にある「はで」という語は、どういうことですか。

答 「はで」という語は、鳥獣が矢玉を受けて負傷している状態をいいます。この意味のことを、次の諸書がほぼ同様に記していますので、それらをそのまま掲げておきます。

1. 「仙台市史」第6巻の内「方言」（藤原 勉）

『はで（麿語） 浜萩「はで 羽手とかけり。鳥の手負せし事。立所にとまらざるをいふ。猪鹿などにも通じていへり」。「狩猟の際鳥獣の手負ひたるをいふ。陸奥日記〔みちのくにっき〕の本文に『やうやく雉一羽おり出て撃ちたるにはでになりて河原に落入りにけり』とあるに註記して、『はでとは疵あさくしてとび行くをいふ』とあり（真山氏）。仙台では現在つかわない。栗原では鳥などを半射ちにして飛び去るのや〔略〕。「ハデにしてにがしたのでばれた」など半途の意につかっている。半手負いの意で、端手であろう。手は傷の意。』

2. 「宮城県史」第20巻の内「方言語彙」（藤原 勉）

1. （前記）と同じ記述。

3. 「栗原郡誌」(栗原郡教育会編)

『はで、鳥獸ナドニ矢玉命中セズシテ手負ニナリタルコト』

4. 「登米郡誌」上巻(登米郡役所編)

『はで 鳥類の傷いたこと』

5. 「柴田郡誌」(柴田郡教育会編)

『はで 鳥獸などに矢丸〔やだま〕の命中せずして、手負になりたるもの』

6. 「仙台方言考」(真山青果)

『はで 狩猟の際、鳥獸の手負ひたるをいふ。陸奥日記の本文に「やうやく雉一羽おり出て撃ちたるに、はでになりて河原に落入りにけり」とあるに註記して、「はでとは疵あさくしてとび行くをいふ」とあり。』〔前記の1および2の記述中に引用してある〕

7. 「全国方言辞典」(東条 操編)

『はで 鳥獸の手負になったこと。仙台(浜荻)・岩手県江刺郡・宮城』

8. 「三本木町誌」下巻(三本木町誌編纂委員会編)

『はで 鳥獸の手負いたるもの』

9. 「豊里町史」下巻(豊里町)

『はで 鳥類の傷いたこと』

注(1) 明治22年町村制施行の際、旧伊達領以来の前谷地・和淵の2か村が合併して成立した旧村、昭和30年3月21日、広淵・須江・北村・鹿股・前谷地の5か村を合併して河南町〔かなんちょう〕を新設した。前谷地は、現在有数の米所となっているが、昔は北上・江合等の諸川が作った低湿な谷地地帯であった。地名もこれから起原したもので、「安永風土記御用書上」の前谷地村名由来にも次のように記されている。『当村往古は野谷地に御座候処深谷〔もと庄名、今の河南・矢本・鳴瀬3町にわたる地域〕北村真言宗深谷山箱泉寺〔そうせんじ〕境内の林当村鳥屋崎御林まで引続き申候に箱泉寺前の谷地と唱来候に付村名に罷成候由申伝候』。なお、箱泉寺は清和天皇の貞観〔ちょうがん〕年中〔859-878〕慈覚大師が開基したと伝えられる古寺である。

注(2) 宮城県教育会編、昭和8年発行。このシリーズは全3輯で、第1輯は昭和6年、第3輯は〔昭和10年〕の発行である。

注(3) 白鳥類は雁鴨目雁鴨科〔がんかももくがんかもか〕に属する純白で優美な水鳥である。このうちのオオハクチョウはヨーロッパ北部・アジア中部・カムチャツカ・樺太一帯で繁殖し、冬はヨーロッパ・アフリカ北部・小アジア・中国・日本へ渡る。またハクチョウは、北米の最北部で繁殖したものは太平洋で、ソ連の西部と北部で繁殖したものはスカンジナビアとヨーロッパで、東部シベリア及び樺太で繁殖したものは中国と日本で、それぞれ越冬する。水中植物の地下茎や塊茎や藻などの食料を求めながら、北の渡来地の湖沼や入江

や川が結氷するにつれて、次々にまだ結氷しない南の水域へと集団をなして移動するのであって、数千キロの長途を一気に越冬適地に渡来してくるのではない。わが国の白鳥飛来地は、今は限られてしまったが、昔は東北・新潟以北全域の川という川、沼という沼に、今とは比較にならぬ数の白鳥が渡来して越冬した。厳しい冬の訪れと共に、きまって姿を現わす白鳥の他の鳥々にはない清純で神秘で高貴な美しさに魅了された人々は、そこに神を見たのであった。日本古来の神観念は靈魂即神である。靈魂が神たる白鳥になるという信仰の発生は、如何に悠遠の原始時代であったろうか。日本武尊が東征の帰途に病歿し、その魂が白鳥となったという有名な神話伝説もその一つである。白鳥そのものを愛護する慣行は当然のことで、白鳥神社や白鳥伝説が、水のほとりに今なお数多く残っているのは、白鳥信仰の純粹強烈であったことを物語るものである。現在宮城県内で白鳥が最も多く渡来するのは、伊豆沼および内沼とその周辺（築館・若柳・迫の3町にわたる）であって、昭和40年12月1日天然記念物の仮指定42年9月7日日本指定がなされた。

- 資料 仙台市史第6巻
宮城県史第20巻
栗原郡誌（栗原郡教育会編）
登米郡誌上巻（登米郡役所編）
柴田郡誌（柴田郡教育会編）
三本木町誌下巻（三本木町誌編纂委員会編）
仙台方言考（真山青果）
真山青果全集第15巻
真山青果全集（新版）第17巻
全国方言辞典（東条 操編）

102 「アメリカ及甚」とはどんな人物か

問 「アメリカ及甚」とはどんな人物ですか。

答 「アメリカ及甚」とは、明治中期に密航によってカナダ移住に成功した及川甚三郎のことで、当時海外事情に疎くカナダとアメリカとを区別できなかった人々が、彼を「カナダ及甚」ではなく「アメリカ及甚」と呼ぶようになったのです。

彼は、安政2年11月26日、登米郡米川村字鱒淵の農家小野寺重郎治の3男として生まれました。

(1)